



Gemeinsame Medienmitteilung **24. August 2012** **zum Buch**

Lieber heute aktiv als morgen radioaktiv **Band I**

Wo die Energiewende weg von **Atomenergie begann**

Die Badisch-Elsässischen **Bürgerinitiativen**

Ihr Widerstand gegen das Atomkraftwerk Wyhl und
weitere Standorte und die Folgen bis Fukushima -
lieber aktiv als radioaktiv

Übersetzung ins Japanische: Mika Kumazaki

「バーデン・アルザス・市民イニシアティブ **(Badisch-Elsässische Bürgerinitiativen)** **」と「エコトリノーヴァ (ECOTrinova e.V.)** **」の共同プレス発表 2012年8月24日**

脱原発運動からエネルギーシフトが始まった地で

「ヴィール町および他のどの場所にも原発はいらない」という「バーデン・アルザス・市民イニシアティブ」の運動は、ドイツ南西端、南部オーバーライン地方ですでに1970年代の初めに始まり、今日に至っています。市民運動としても、再生可能エネルギーの研究といった面でも、この地域だけでなく国外にも大きな影響を与えてきましたし、今も与えて続けています。

ドイツの脱原発運動を進めてきたのは、1986年のチェルノブイリ、2011年の福島での原発災

害だけではありません。1970年代の初めにはすでに、原発に対する拒否感や批判的な知見がドイツ全体に幅広く行き渡っていて、数十万人におよぶ市民が計画中の、また現存する原子力施設への反対運動を展開したのです。ライカ出版から出版された「あした被爆するより今日抗議しよう (Lieber heute aktiv als morgen radioaktiv)」では、反対運動の歴史をつづったシリーズの18冊目として、以下の闘争をとりあげております。1. ブライザッハ市 (ライン川)、2. ヴィール村、3. フェッセンハイム村 (アルザス地方)、4. ブロックドルフ村 (エルベ川)、5. グローンデ村 (ヴェーザー川) における原子力発電所反対運動、また6. ニーダーライン地方カルカー市の高速増殖炉、および7. バイエルン地方のヴァッカーズドルフ町における核廃棄物の再処理工場反対運動です。4本の優れたドキュメンタリー映画を収めたDVDが付いていて、このテーマについてさらに知見を深めることができます。

反原発運動に携わった6人の筆者が、時には現地の抵抗運動に尽力した活動家として、時には歴史を振り返り分析する証人として、彼らの体験を描写していきます。またゲッティンゲン市のライマー・パウル氏は、ヴィール原発反対運動からチェルノブイリの事故、そしてその後の運動の展開を検証しています。本の一番の寄稿者であるゲオルク・レーザー博士 (フライブルク市・グンデルフィンゲン町) は1970年から2011年にかけての歴史をまとめています。それらの活動が、その地域を越えドイツ全体にまた他の国々に及ぼした数多の重要な影響を、今日

の市民たちによる現地の活動とともに追求していきます。市民の力によって建設中止に迫られた2つの原発建設への反対運動（ブライザッハ市1971・72年以降。ヴィール村73・74年以降）をお手本に開花したものは、ドイツおよび世界中の反原発運動だけではありません。近代の「緑の」政治運動もここに重要な根源を持っているのです。この地域では1976年にすでに代替エネルギーを模索する市民運動が発生し、ソーラーエネルギー見本市が開かれました。その流れで環境保護に関する団体や研究機関、例えばBUND（ドイツ環境自然保護連盟）、エコ・インスティテュート（研究所）、フラウンホーファー研究所の太陽エネルギー部門、などが樹立して発展していきました。フライブルク市が「環境首都」「ソーラーエネルギー首都」として幾度も顕彰されるようになったのもここに原点があります。この名声は、ヨーロッパさらに世界中に知れ渡るまでになりました。

この本についている2枚のDVDには、1972～1987年の反原発運動を追った4本の有名なドキュメンタリー映画が収められていて、本の内容をさらに充実したものにしております。『あした被爆するより今日抗議しよう』と『蜂の巣—1971～82年ヴィール村年代記』はライン川沿いのブライザッハ市とヴィール村の原発建設計画を、『北には美しい国がある』はエルベ川ほとりのブロックドルフ村の原発建設を、『核分裂プロセス』はバイエルン州ヴァッカーズドルフ町の使用済み核燃料再処理工場をめぐる反原発運動をそれぞれとりあげています。

「あした被爆するより今日抗議しよう～ヴィール村からブロックドルフ村へ反原発運動を追って～」

住民運動シリーズ18巻。著者：ゲオルク・レーザー、アクセル・マイヤー、イェンス・レナー、ウリ・ボーチャース、ヘンリー・ランガー、ライマー・パウル ドキュメンタリー映画『あした被爆するより今日抗議しよう』『蜂の巣—1971～82年ヴィール村年代記』『北には美しい国がある』『核分裂プロセス』収容DVD付き、227ページ、写真多数掲載、2011年ライカ出版、価格29,90ユーロ

プレス発表お問い合わせ先

バーデン・アルザス・市民イニシアティブ
スポークスマン エアハルト・シュルツ

Kandelstr. 51, 79312 Emmendingen, erhard-
schulz@t-online.de, 07641-41252,
www.badisch-elsaessische.net

エコトリノーヴァ

代表 ゲオルク・レーザー博士

Weiherweg 4 B, 79194 Gundelfingen,
ecotrinova@web.de, 0761-5950161,
www.ecotrinova.de

本より抜粋

ゲオルク・レーザー氏による本章から、序章と概要

南オーバーライン地方およびその他の地における原発に反対し、代替エネルギーに舵を切るための国境を越えた運動。

バーデン・アルザス・市民イニシアティブによるヴィール村等での原発反対運動とその影響

～福島での災害まで～

ライン川が国境を挟んで流れる南部オーバーライン地方。そこでは、ドイツ側およびフランス側両岸において「バーデン・アルザス・市民イニシアティブ」と、数多くの市民が一緒になってひとつの歴史を作りました。彼らの活動の頂点であり焦点であったのは、ヴィール村（独バーデン地方）と、フェッセンハイム村およびゲアストハイム村（ともに仏アルザス地方）に計画された原子力発電所、加えてマルコルスハイム村（仏アルザス地方）に計画された鉛化学工場でした。バーデン・アルザス・市民イニシアティブが公式に成立したのは1974年の8月25日、ドイツのヴァイスヴァイル村でのこと。会の委員は複数の国から選ばれ、「21の市民団体によるバーデンとアルザス地方の人々に向けた声明」は発表されるやいなや、たちまち賛同団体の数を50近くにまで伸ばしました。歴史的背景をみればほぼ同時期に、スイスのバーゼル市近郊カイザーアウグスト村の原発建設をはじめ、3か国国境地帯における様々な核関連施設の建設を阻止するべく市民による抗議活動が起きていました。フランスのフェッセンハイム原

発への反対活動もすでに始まっていましたし、何よりヨーロッパで初めて非常に集中的に行われ、大きな反響と成果をもたらしたブライザッハ原発反対運動がありました。非常に広大な上、原子力発電所によって稼働される工業地帯が南オーバーライン地方に作られることは到底容認できないことだったのです。マルコルスハイム村、ヴィール村、カイザーアウグスト村でとりわけ拡大した抵抗運動の背後には第一に、生活の基盤が脅かされるという共同の不安が潜んでいました。自分たちと将来世代の命と健康が、ワインブドウ栽培と農業が、美しい故郷が、馴染みの職場が危機にさらされたのです。

抵抗運動やその他の多様な活動を通してバーデン・アルザス・市民イニシアティブは、原子力に対する批判的な見解の礎石を3か国地帯に築きました。それはバーゼル地方（スイス）の2郡での住民投票で早くも政治的に明らかになりましたし、例えば「アルザス地方にこれ以上原発は認めない」という市長・自治体・市民団体の共同宣誓が出されましたし、南バーデン地方でさらなる核関連施設の建設が阻止されたことで頂点に達しました。またバーデン・アルザス・市民イニシアティブは、運動をする同じ市民として国境を越えた協力・連帯の模範例を示しています。それはこの国境地帯における公式な協力関係にもよい影響を与えてきたのです。

バーデン・アルザス・市民イニシアティブはまた13年以上に渡って「市民講座ヴィールの森」を開催してきました。時には市民が占拠した原発建設予定地で、時には町や村で、交流と

情報のセンターとして、革新的で親しみやすい教育の場として、「パワーの源」として、アルマン語の文化センターとして、そして市民活動の金看板として働いてきたのです。

また 1976 年から 78 年にザスバッハ村で行われた人気イベント「ソーラーの日」のように、反対運動の中からはエネルギーに関するポジティブで具体的なビジョンが生まれていきました。これは後にアルザス・ローファッハ町で開催され好評を博した「オーガニック見本市」や（現在はコルマール市で開催）、フライブルク市で開催された「ソーラーエネルギー博」「環境博」などに引き継がれ、ドイツ国内やさらに他の国々でも大きく発展していきました。この地域やまたドイツ国内における重要な環境保護団体、代替エネルギー連盟などもこの流れで誕生し拡大していきました。またオーバーライン地域が環境とソーラーエネルギーのモデル地域となったきっかけもここにあったのです。

バーデン・アルザス・市民イニシアティブは、その規模を縮小したものの、新しいテーマに取り組みながら現在に至っています。彼らが及ぼした影響や、その「抗議する文化」によって、国家や大企業、国境という巨大な相手と格闘するという困難な戦局においても、「下からの民主主義」が実現したのです。

ヴィール原発建設をめぐる抵抗を筆頭に、これらの功績は世界から注目を受けましたし、そのポジティブな影響は、南オーバーライン地域を飛び越えてどんどん広がっています。

バーデン・アルザス・市民イニシアティブの活動を鑑みれば、「市民やそのグループが政治

家や産業界に対して声をあげ続けていくこと、責任を政治家などに預けず自分自身で引き受けること」の必要性が明らかになってきます。

ラジオ「ドイツ文化放送」、ヴィンフリード・シュトレーター氏の書評(抜粋)

<http://www.laika-verlag.de/bibliothek/lieber-heute-aktiv-als-morgen-radioaktiv-i>

出版社は、ドイツの歴史の中でもとりわけ重要な政治運動を、それに相応しい形で取り上げました。2冊の本によって反原発運動が回顧されています。（中略）

彼らの活動の経過や経験を残し伝えていくことは、重要な文化的課題です。1巻目の冒頭では、非常に興味深い歴史であるバーデン・アルザス・市民イニシアティブの戦いを、1972年から携わっている活動家の一人ゲオルク・レーザー氏が叙述しています。（中略）

特に注目すべきは、活動家たちの報告の中で、いかに市民が様々な状況に対処して運動を組織していったか、いかに活動方法が熟考され決定されていったか、さらにはそれらを通して、当時シュトゥットガルトで大多数を占めていたCDU党（キリスト教民主同盟）も無視できなくなるぐらいの勢力がどのように生じていったか語られているところです。（中略）

成功を収めたのはヴィール村の原発建設反対運動だけではありません。地域全体が政治的にも文化的にも、より開かれた、より活発でより賢明な方向に変化を遂げたのです。闘争する「下からの民主主義」を象徴する一冊といえるでしょう。